

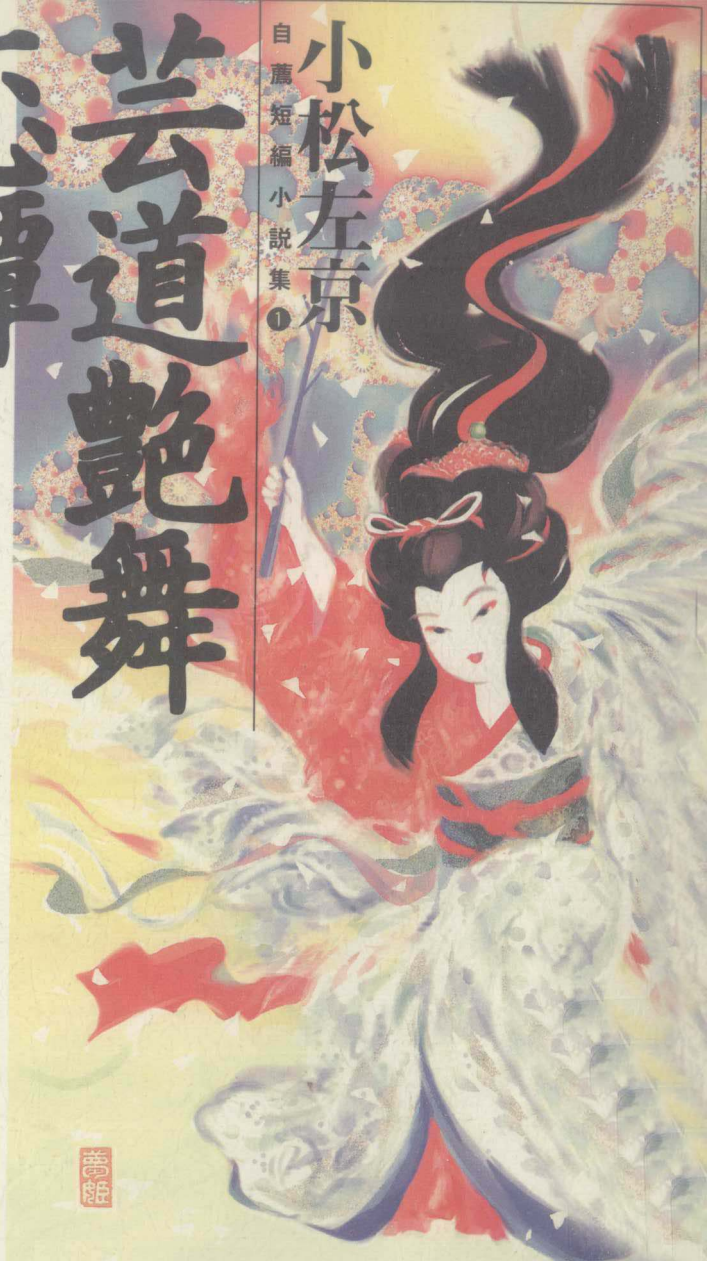
恋譚 芸道艶舞

げいどうえんぶこいものがたり

小松左京
自薦短編小説集①



廣濟堂出版



芸道艶舞恋譚
げいどうえんぶこいものがたり

小松左京
舟薦短編小説集①

芸道艶舞恋譚

著 者 小松左京

発行者 櫻井道弘

発行所 廣済堂出版

〒107 東京都港区赤坂6-17-5

電話 03(3584)7610 (営業)

03(3584)6123 (編集)

振替 00180-0-164137

印刷所 廣済堂印刷株式会社

〈編集担当〉河本祐里

©1995 小松左京

Printed in Japan

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-331-05641-4 C0093

芸道艶舞恋譚

「げいどうえんぶこいものがたり」

小松左京

目次

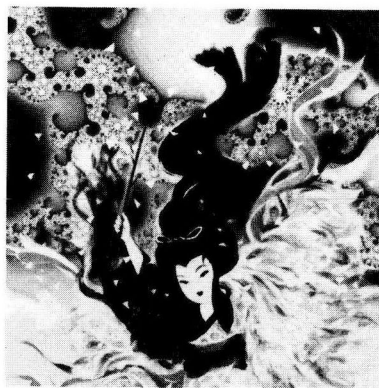
明鳥 5

鷺娘 49

戻橋 121

山姥譚 179

口上 229



カバーデザイン 永原康史

カバーイラスト 駄場真弓

*

企画・制作 フジマックオフィス

明

烏

あ
け
が
ら
す



山越えに都市まちを出はずれて行く国道を、橋の袂たもとで左におれ、川端を十分ばかりさかのぼった所でタクシーをすてた。

一ときやんでいた雨が、またこまかい霧雨となって降り出し、流れにそった柳の並木や、濃緑につつまれた寺院の山門を、ぼっとぼかしこみはじめている。

レインコートの襟を、ちよつとたてるようにして、彼は車をおりた地点のすぐ先にある、一方通行の小径みちを左に折れて行つた。

径の一方は、古刹こさつの境内をくぐる古い築地塀ついでい、反対側は、これもすつかり時代のかかった建仁寺垣けんんにんじがきが長くつづき、どちらの側からも鬱蒼とした緑が、径におおいかぶさるようにふき上げていた。

小径をはいつて、ほんの二十メートルほど行くと、建仁寺垣の途中に、昔の商家を思わせる、古びてどっしりとした建物の入口がある。——声をかけると、右手の土間に通じる、

色あせた茶色の暖簾のれんをかきわけて、中年女性があらわれ、一礼して蛇じゃの目をとると、先にたった。

建物の左に、竹の腰掛があり、そのむこうの小さな茅葺屋根かやぶきのついた門をくぐって行くと、雨にぬれた呉竹くれたけの葉が、肩にふれてこまかい滴をちらした。

植えこみにせばめられた露地の石畳を、三間も行くと、これも古びた待合まちあいがあり、背中合せの砂雪隠せっちんのむこうが厠かわやになっている。待合の先の露地は、蹲踞つくばいからむこうがさらに深い緑の中へおれこんでいる。

藁屋根の小さな茶室風の一軒に通されると、客はもう来ていて、丸太縁にちかい端にすわって、ひっそりと、小糠雨こぬかあめにうたれる庭と池を見ていた。

「おそくなりました」給仕口をくぐって、相伴席に膝をつきながら、彼は頭をさげた。「およびたてしておいて、すみません。たのんでおいた車が、パンクしてのりかえたものですから……」

客は座蒲団をすべって手をつき、深々と頭をさげ、

「本日はお招きにあずかりまして……」と、あらたまつた口調で言った。「池亭^{ゐけてい}でおよばれなんて、まったくひさしぶりでございましたので、うれしくて、つい早目に來てしまつたんでございますよ」

「おえいさん、今日は一つそちらへすわつてください」彼は正座^{しょうざ}をさした。「およびしたのは、おねがいがあつての事ですから……」

「とんでもございません」と、旅館^{りやうくわん}、たつみの女将^{おかみ}はかたく首をふつた。「そんな事できるわけがございませんわ。片倉さんとは長いおつきあいじゃございませんか」

「それだから、たつておねがいしているんです。あなただって、もうお座敷に出てゐるわけじゃない」

「でも、そちらさまは店^{うち}のおとくいさまです。殿方が、小旅館のおかみ風情の下座におすわりになつちやいけません。——何かお命じになりたい事がありなりましたら、床柱を背になさつて、おかみ、たのむ、といばつておっしゃればいいんです」

「それが、今日ばかりはそう行かない。客の何のと言う立場をはなれて、一人の男として、

あなたにおねがいしなきゃならない事があるんだから……」

押し問答をしているうちに、蘭の花の飲み物と、小さな煉切りねりきがはこばれて来た。——座のきまらない風情に、給仕の女性がちよつと困つたような顔をしているすきに、女将の横の座蒲団をもつて正客座にすえてしまい、自分はさつさと横になおつた。

まだ困っているような顔をしている女将に、かさねて座をすすめながら片倉は笑つて言つた。

「私は知りませんが、昔の遊びに、芸者衆をお客にしたてて、お客が芸者新造の役でサービスするつてのがあつたそうじゃありませんか。——まあ、そうでも思つて、ひとつ気楽に……」

「まあ、遊びとおっしゃられては負けますわ……」と女将も手の甲を口に当てて笑つた。

「じゃ、いたしかたございません。今回だけと言う事で……」

もう給仕口の方には、折敷おしきと銚子、引き盃おしきがはこばれて来ていた。

正客座にすわればすわつたで、ちゃんときまるのは、そこは貫禄だった。——女将は、

今日はしぶい藤納戸色の細小紋をきっちり着つけ、白っぽい細に光琳風の菖蒲を描いた帯をしめていた。——江戸小紋の味が、いかにも深みがあるので、眼をこらして見ると、霰かと思えた地紋は、こまかい宇治川であり、つなぎの乱れによって、光琳洲浜が、うき出している、と言った手のこんだものだった。

古びた根来の足付膳が二人の膝前にはこぼれた。——大ぶりの秀衡椀が二つ、向う付けは黒織部にすずきらしい造りがもられている。

給仕の女性が、志野の盃台から、朱塗刷目の木杯をとりあげて、二人にすすめた。——南部鉄に朱塗の摘蓋のついた銚子から熱い酒がながれ、お互いちよつと頭をさげて呑みほすと、給仕女は、どうぞごゆつくりと頭をさげて、さがって行つた。

足音がひたひたと渡り廊下を遠ざかって消えて行くと、しとしとと植えこみや軒をうつ雨音が、ひなびた草庵風の入室をみたした。

その料亭の客室は全体が、数寄屋づくりになっていて、こんもりとした築山のむこうに、別の藁葺きの小屋の屋根が見えている。——客は無いらしく、人の気配はない。

青木、檜^{ますき}、霧島^{きりしま}、南天、梅と言った植えこみの間で、青楓^{かえで}の明るい緑が、次第に暗くなりつつある空の下で、とりわけ見事だった。——縁先に、小さな池があつて、池の中にたった柱に、二間に五尺ほどの細長い屋根が、舟蔽いのようにのつている。雨のせいか、池の鯉が、その蔽いの下に集まり、濁った水の下で、紅白の渦をつくつてゆっくり動いている。

部屋は茶屋風のつくりで、茶会もおこなわれるらしかったが、料亭の客室なので、庭向きの二方は、壁でなく障子にしてあけはなつてあつた。田舎間の四畳半^{だいめ}台目、天井は木賊^{とくさ}張りで、中柱は黒松皮つき、壁は聚落土^{じゅうらくつち}をぬつて腰に反古^{はご}を張り、床には大雅堂^{たいがどう}の扇面を表装してかけ、竹の釣り舟の花器には、あまり見かけない、紫色の花がいけてあつた。

「これは珍しい……」と、彼は蓴菜^{じゆんさい}の田舎味噌^{じゆんさい}じたてをすすする手をとめて、花をさしながら言った。「花しのぶと言つてね、九州の山にわずかにのこっているものですよ。——このごろどこかで栽培しているのかな」

預け徳利と石杯をはこんで来た若い女性に聞くと、似ているが、こちらはみやま花しの

ぶと言つて本州の高山に咲くものだ、と教えてくれた。若主人が、山菜とりをかねた山登りが趣味で、植えている人にわけてもらったのだ、と言ふ。

正客の座にすわらせながら、黒薩摩の預け徳利は、まんまと女将にうばわれてしまい、彼は頭をかきながら萩のぐい呑みを取り上げた。

あわび 鮑の真蒸葛引きの椀盛りが、高台寺時絵まきえの器ではこぼれて来た所で、明りがついた。

——女将の白い顔と、着物の藤納戸色が、あざやかな対比を見せて室内にうき上った。木杯と石杯で一杯ずつあけただけなのに、もう女将の白いふくよかな頬の底には、ほんのりと赤みがさしかけていた。けっこう呑めるのだが、すぐ顔に出るたちで、半玉はんぎよくのころからよくからかわれたと言ふ。

「お話と言ふのは何でしょうか？」

と、酒をすすめながら、女将は笑いをふくんだ声できいた。

「まあ待つてください。——もう少し飲まなけりや、言いにくい……」彼もちよつとわざとらしく、おどけた調子でうけた。「まあ、もうしばらく料理をたのしみましょう。——ほ

ら、この鰻はもの付焼つけやきの鉢わは魯山人ろさんじんですよ。ちよつといいでしょう。ここの自慢なんです」

それからあとは、とりとめない話がつづき、酒がはずんだ。——女将は預け鉢に出た海かい藤花とうげの煮物を珍しがり、彼がそれを蛸たけのこの子、それもはらごでない、海底の洞穴や蛸壺たけのこの中にうみつけれられたもの、と説明すると、嘆息をなつてつくづくと眺めた。強肴しやうざかなになつて出た酒盗しゅとうに、今度は彼の方が首をひねっていると、女将が鮎あさの真子まこうるか、と教えてくれた。

すでに徳利は四、五度替り、女将が顔を気にしてか、控えがちなので、彼のみ酔いが深まる感じだった。——辛口の、いい酒だったが、湯桶ゆとうの出るころは、酔いがずっしりと腹にこたえて来て、口もつい重くなり勝ちだった。

すでに日はとつぷりと暮れていた。部屋から庭へ洩れる明りでは、雨がやんだように見えるのだが、まだ霧雨がしとついているらしく、暗い中で、どこかの軒から落ちる雨垂れが、熊笹の葉か何かにあたつて、ぱさりと鳴る音が、間遠になりながらもとだえる事なくつづいている。